

私たちが住む町の未来について考える

鳩山町立鳩山中学校 2年 山室 未来

シェアハウス「はとやまハウス」

これは、近年高齢化が進む鳩山ニュータウンで、空き家を学生向けシェアハウスへ改修し、運営を行うモデル事業である。高齢化が著しい鳩山ニュータウンで展開されている地方創生のためのプロジェクトで、若者とまちをつなぎ、地域の活性化につながる取り組みとして期待されており、今現在三名の学生がシェアハウスに住んでいる。入居者は、鳩山町の公共施設で月三十二時間働けば、賃料が無料になる。

広報はとやまに[はとやまハウス]の紹介記事が掲載されており、このユニークなプロジェクトに興味があった。調べてみると、十三年間住み続けてきた自分の町について、初めて知ることが多く、驚くべき事実がわかった。

鳩山ニュータウンは、東京郊外にベッドタウンとして作られた町だ。私の母が鳩山中学校に通っていた頃は八クラスあり一学年の生徒数は三百を超えていたという。それだけでも驚きだが、現在の鳩山町は少子高齢化が進み、五十%以上が高齢者になっていることがわかった。

税金を納めているのは働く世代であることは知っている。働く世代が減少するということは、それだけ町の税収入も減るということになる。鳩山町にとって、このまま人口の減少と少子高齢化が進めば、町の死活問題に発展する。しかし、広報はとやまに掲載されていた[はとやまハウス]の記事を読み、母も祖母たちも、口を揃えて「素晴らしい取り組みだ」と絶賛していた。鳩山町の未来に光を感じることができた。

[はとやまハウス]の運営にももちろん税金が使われている。税金の使い道は医療や福祉・教育・子育て世代への給付金など様々あるが、[はとやまハウス]のような未来あるプロジェクトに税金が使われることに、私は賛成したい。

空き家を町が買い取り、近隣にある大学の建築学科に通う学生を募集し、入居者自身に空き家のリノベーションに参加してもらおう。学生にとっては実践を通して学習できる素晴らしい経験になるはずだ。さらに、鳩山町に住むことによって、鳩山町の良さを肌で感じてもらうこともできる。高齢者にとっても、若者が公共事業や町の活動に参加することは嬉しいだろう。[はとやまハウス]を体験した学生が大人になって家族ができた時、鳩山町で生活したい、と思ってもらえれば、いつかこのプロジェクトが実を結び、加速する少子高齢化にストップをかけられるのではないかと期待している。町にたくさんの家族が集まり、学校や商店、夏祭りなどのイベントにもぎやかになっている未来を想像したい。